

### 第 39 回安田女子大学・安田女子短期大学エッセイコンクール

優良賞 自由部門：「正々堂々と生きること」

児童教育学科 2 年 3 組 上田吏桜

「消えてほしいんだけど。」中学 1 年生の終わり頃、クラスの誰かにそう言われた。その言葉がすごく胸に刺さって、それから私はクラスでだんだん孤立していった。教室では誰も目を合わせてくれなくなって、無視されるようになった。飾ってある作品に落書きをされたり、毎日のように直接大きな声で悪口や替え歌を歌われたり、下駄箱に枯れた花を置かれたりすることもあった。はっきりした暴力じゃないけど、毎日毎日心が削られて、死んでしまいたいと何度も思った。毎朝、布団の中で「今日も何も嫌なことが起きませんように」と何度も願いながら、震える手で準備していた。周りは何も気づかないふりをしていたように見えた。気づいていても、誰も声をかけてくれず、それが何よりもつらかった。

そんなある日、フラッと図書室に行った。そこは人が少なくて静かだったため、ちょっとだけ安心できそうだった。本棚の陰にこっそり座っていたら、涙が自然に出てきた。心が限界を迎えていて、ただただ泣いてしまった。しばらくして、「大丈夫？」と隣のクラスの子が声をかけてくれた。前にちょっとだけ係の仕事で一緒になったことがあったけど、仲良くはなかった子だった。私は何も言えなかったけど、その子は「話さなくていいよ」と言って、そっと隣に座ってくれた。何気ない行動だったが、当時の私にとって初めて私に共感してくれる人で、強い味方に感じられた。「ひとりじゃないかも」と、少しだけ思えた気がした。

その優しさが心に響き、初めて保健室に行ってみようと思った。教室に戻るのがどうしてもしんどくてたまらなかったため、保健室の先生に「ちょっと、しんどいです」とだけ伝えと、先生は「ベッドでゆっくり休んでいていいよ」と静かに言ってくれた。責められたり急かされたりしないその安心感が、私を救ってくれた。次の日も保健室に行って、少しずつ気持ちを話せるようになった。「最近、教室にいるのがつらくて…」と話し始めると、先生は「話してくれてありがとう」と優しく言ってくれた。自分の気持ちをそのまま受け止めてもらえるのは、本当に心強かった。家でも父に話すことができた。泣きながらだったけど、父は「気づけなくてごめん」と言って、ただ黙って聞いてくれた。しかし、「やすんでもいいよ」とは一度も言ってくれなかった。なんで一番つらい思いをしている私が学校に行かなければいけないのか理解できず、毎日「学校に行きたくない」と泣き叫んでいた。今になって、当時の父の行動に感謝するようになった。なぜならば、私は父のおかげで一度も負けずに学校に行くこ

とができたからだ。

自分の気持ちを言葉にすることはとても大事なことである。助けを求めることは恥ずかしいことじゃなくて、自分を守るために必要だとわかった。いじめは受けた人の心に深い傷を残すけど、誰かの優しさで、その傷は少しずつ癒える。私にとっては、図書室で声かけてくれた子や保健室の先生、父の姿が救いだっただ。今でも当時の経験はトラウマで、周りの目を気にしすぎたり、あがり症の症状が出てしまうなどまだ立ち直ることが出来ていない部分はあるけれど、それでも、自分の気持ちに正直に向き合って、自分を守る行動をすることが大事だと学ぶことができた。だから、これから誰かがつらい時、そっと寄り添いたい。大きなことはできなくても、「大丈夫？」って声をかけたり、助けを求めているひとのそばにいて救ってあげたい。

あの頃の自分に「あなたの痛みは無駄じゃない。きっといつか誰かの力になれる。負けないで」と伝えたい。私は、保健室という場所に特別な思いがある。病気やけがだけではなくて、心のことも受け止めてくれる場所だと実感している。保健室の先生は「話せる大人」だった。どんな小さなことでも聞いてくれて、「つらかったね」と言うてくるその気持ちがすごくうれしかった。これらの経験から私は、「養護教諭」という仕事を目指すことにした。養護教諭になり、私が救われたように、人の心に寄り添える仕事がしたい。中学生の時の先生のように、子どもたちが安心できる場所を作りたい。

きっと、あの時の私のように誰にも言えずに苦しんでいる子どもがたくさんいる。その子にとって「話せる大人」でありたい。「ここに来ていいんだ」って思える場所を作りたい。あの時の先生みたいに、そっと寄り添う言葉をかけたい。傷ついた過去を力に変えて、誰かの支えになれる未来を目指して、少しずつ進んでいきたい。そして、これから出会う誰かの心に少しでも寄り添い、支えになりたい。そのために自分も強くなりたい。あの日の自分がそうしてもらえたように、私も誰かの「話せる大人」になりたい。